

宿世の縁

松井太郎

もう一つの連れはどうしたきりぎりす　一茶

妻の千恵に先立たれた太一は、命あるものが避けることのできない生死の離別は、世の中の常と理解していても、この度の事はなかなか心底から納得することができず、一女房はおれより五歳も下だから、あれが残るだろうーと、楽天的な気持ちと安楽な日々になれて、当分はこの現状がつづくものと安心していたのが、つい足をすくわれた体になった。

千恵がいなくなったことにより、たちまち太一の日常に狂いが生じてくる　というのではないが、当然としていたものが無くなってみると、おれたち夫婦の営みは永い夢だったのかという虚しい気持ちは、いくら日がたつてもいっこうに収まりそうにもない。太一は自分の身辺の変化で、以前には気にもとめなかった、知人の誰かれ

を思いうかべてみると、半数はやもめであるし、夫婦でいても再婚の人のおいのを知った。

過去のコロニア（注・日系コロニアの略。日系社会）では困難な開拓当時、風土病にかかり家の柱とたのむ者を亡くした例は語りつながれていて、太一の嫁の縁者にもそんな人があった。四十代でやもめぐらしになり、再婚もせずに子供を育てあげた老人で、息子、娘からは大事にされていたが、身の寂寥は察するにあまりあるようであった。その老人は小地主ながら家産もあったので、なんとかやってこられたのであるが、太一はその頃の自分の境遇を回顧すると、背筋に寒気のはしる思いになる。事実、千恵の身の上に生命の危機があったのも、一・三度ではなかったが、家が破滅せずに来たのは彼女の運のつよさというか、それらを支えていたのは、ひとつの悲願が彼ら夫婦にあったからである。

それというのは、父の重圧の下では不本意な生き方しかできぬと懸念して、分家を申し出たが許されず、太一は無一文で家を出ることになった。その時、父からあびせられた悪罵は忘れることはできない。せめて人並みになつて、弟妹たちから後ろ指をさされないだけの暮らしになりたいという望みであった。苦節十年、なんとか独立のめどがつきかけた年、太一は心臓をわるくした。動けば心悸がたかぶるので、荒い仕事はできなくなった。そんなわけで義父の世話になって、サン・パウロ市近郊

のM郡に、三域の土地をもとめてうつつてきたのであった。R村での二十年。太一夫婦も老いたが、子供たちはみんな成長して、長男の丈二はおなじ村の娘と相愛の仲になり結婚した。それをしおに太一は世帯を息子たちに渡した。それから数年ののち、都会ぐらしの嫁の縁者から、―食料品店の売り物のよいのがあるが、買わないか―とすすめられたという。丈二は乗り気になり、太一も賛成したが、千恵は今日になるまで苦勞したので用心ぶかくなり、とくに家族が分かれて暮らすのに反対したが、店の上が住まいになっているので、みんなで住めるときいて納得した。

都会ぐらしをするようになってからも、千恵は（丈二のママエ）といわれて、みんなに人気があった。日曜日にはきまって何人かの客はあったし、孫たちも友達をつれてきた。千恵はゆっくりとも寝ておらず起きだして、お客にだす寿司とか饅頭をつくるのであった。

そして一日が暮れると、

「ああ、今日はとても疲れた」

溜息をはいてぐったりするので、

「そんな仕事は良子（よしこ）にまかしとけ、いつまでも動ける歳じゃないぞ」

太一がつよくでて意見をすると、

「あれも休日ぐらいは楽しませてやらなくては」

そう言つて発病するまでやめようとはしなかった。

ついの旅になつた訪日から帰つた母をみて、息子はママエは背中がかがんできたーと彼の気づいたこと became 太一につげたが、それから千恵はしだいに痩せるようになった。医者にかかる、糖尿病と診察されて、こまかい食療法を指示された。処方どおりに従っているのに、千恵の体重は秤にかかるごとに針はさがっていった。息子は憂慮してふたたび病院で診察してもらうと、病勢は食事療法の域をこえたとして、インシュリーナの注射にかわつた。

注射は太一ができるので薬局にゆくことはなかつた。

「こんなことで、あなたの世話になるとはね」

千恵は負けおしみを言う。

「なあにー、女の男からの借金なら、口さき一つでどうにでもなる」

「あほらしい、あなたにはよおけ貸しがあるのに、あつー痛い」

ときには千恵は夫の生まれた関西の言葉をつかつたが、そんな日は機嫌はよかつた。治療が注射になつて千恵の痩せはとまりかえつて肥えてきた。そんな徴候に病人は氣をよくし、家族もやつと愁眉をひらいた。

季節は冬から春にうつる頃であつた。好天が二・三日もつづく、外はもう初夏の日ざしで、はやくも薄着にかえたパウリスタナ（サンパウロの人）の街路をゆく

に出会う、太一の住む屋敷は聖市の東部、インペラードル区にある。埃っぽい新開地で、ちかくに大通りがある。一日車の騒音はたえないが、住まいの前に通りをはさんで、頭の弱い娘たちを預かって教育しているという、一区画を占めた尼さんの施設があるので、車の騒音はよほど緩和される。高い塀に囲まれた土地は、建物のほかすべて果樹園になっていて、季節によってはシュシュ（はやと우리）のつるが、塀のそとにはみだして青い瓜がさがる。時には放れ馬が二・三頭とつれだつて、この裏通りに迷いこみ、糞を路に落としてゆく、そんな鄙びたところもこの区には残っていた。外ではもうあつ織のシャツでは汗ばむほどであるが、この家の客間ではまだ冬のなごりがうずくまっている気配であった。

女中が二階の夫婦の部屋を掃除するというので、太一は追い立てられ本を片手に客間におりてきた。千恵は養生をしなければならぬ身体だが、暇をもてあまして、細糸でレース編みをしていたが太一に叱られ、近ごろでは太糸であむ敷物をあんでいる。太一は空いているもう一つの長椅子に足をのばして、持ってきた本をひらき、どこまで読んだかとページを目で眺めていると、一声たかくベンチービが鳴いた。何科にぞくする小禽かしらなけれども、鳴き声がポ語で、（わたしは来てお前を見たよ）の意味にとれ、鳴き声そのまま鳥の名になつて、一般にとおっている。

農村ではこの鳥がなくなると、低地にあるイッペの鮮黄の花がほころびるのと共に、もう霜はおりないというので、農家ではいそいで苗を本畑にうつすのもこの時期である。大都会のなかでこれらの小鳥は、一区域の果樹の茂みでもあれば、生存できてげんきよく鳴きかわすのを聞いて、太一は詩趣をおぼえた。

「あー、ベンチービが鳴いている」

千恵は編み物の手をやすめて、ひとりごとを言った。

「あの鳥は去年も鳴いていたのかしら」

「うん、ここに移ってきてから聞いている」

「蝉の声はよくきいたけれど」

「ああー、蝉しぐれか、あれはもつと先のものだ」

夫婦の間にこのような会話があったが、千恵は蝉のなぐ季節までは生きていかなかった。

その頃、太一はまだ妻の病状は慢性の軽いものとみていた。彼の知人のなかにも千恵とおなじ病気のひとがいて、もう十年からインシュリーナを打ちつづけているという。毎日欠かせない注射も、無為の彼にはよい日課になった。というよりは太一の心にあるはずみがついているのを自覚して、近ごろとみに神経過敏になっている妻に見破られないかと、ギョツとなるときがある。

思い返してみると、千恵にーあんたはわたしがこんな病気にかかったのを、喜んでいるのでしょーと、言わ

それでも否定できかねる心境にあったのも事実だったが、それは千恵がもうすこしよわい女になるのを、彼が望んでいたからではなかっただろうか。

そのような折にRという青年が、家で寝起きするようになった。嫁の甥にあたる青年で、父の仕事をたすけていたが、ゆくゆくは店をやりたい・と叔父にたのみ、丈二の店で働くようになった。はじめは千恵も心よく迎えたが、やはり親戚の者といっても、松山家にとっては異質の者であった。

田舎そだちの故ではないだろうが、人間が無愛想で、高慢なところがあり、驕もなにもなかった。とくに食物にかたよっていて、油飯、フェジョン（煮豆）に肉のほかはいっさい食べようとはしなかった。千恵もはじめのうちは宥めすかして、家の風に馴らそうとしたが、相手はとても荒馬のような鼻息で、千恵の手にはおえそうもなかった。

その場面の一端をここに記述すれば、Rは帰宅するなり台所にはいつてきて、

「婆ちゃん、きょうはなにがある」

ときき、自分の好きな料理であれば、といっても三品しかないが、

「やっー」

Rは奇声をあげて、陶器の皿を宙にまわすのであった。そして皿にご飯をもり、フェジョンをたっぷりとか

け、大皿にもつてある焼肉を上から一切れか二切れをとるならまだしもガルホ（フオーク）で下からかきまわすのを見て、はじめから虫のすかない青年だったので、千恵はカッターとなつて、

「上も下もおなじだよ、はじめの者が上からとるのが作法というものよ、まだパトロンも席についてないのに、使用人のくせに生意気だ」

頭にきた千恵がポ語でRをやりこめた。このような日用語になると、千恵は太一とちがつて、二世・三世にまけないほど、思いのままに意思の表示ができたのである。

それにRが壁にもたれて、立ち食いをやるのも気に入らなかつた。I H子さんはRをどんな育てかたをしたのかしらん、躰もなにもなくて、見ていると下層階級のやるとおりじゃやないのIと、憤懣やるかたないといったふうで、太一の同意をもとめたが、いつも押されぎみの彼は胸のなかでニヤリとした。形はちがえ自分の若い頃とRは似ていたからであつた。この勝負はおもしろいと、千恵が知れば怒るような考えを太一はしていた。不平といえは千恵にとつて夫はいちばんのルサンチマンの相手ではなかつたのか。

ところがこの対決は長くはつづかなかつた。Rが日本へ出稼ぎにゆくことになつたからである。千恵はIあの我が儘者が、日本でみっちりしごかれたらよいIと、憎

まれ口をいった。

後日、太一が回顧すると、千恵はRとのかかわりで、病気を昂進させたようであった。

日がたつにつれて、千恵は腰や下腹の痛みを訴えるようになった。寝台から起きるときはうめきさえた。それでも起きてしまえば、家族の食事の支度はしていたのであった。

このような日常がすぎてゆくある日のこと、トイレから千恵の叫ぶ声がするので、太一が急いでかけつけてみると、

「こんなものがでた」

と言う千恵の顔色は変わっていた。太一が後架をみおろすと、卵白のような粘液にまかれて、どす黒い大便が底にしずんでいた。太一はすぐにそれは血便と直感した。それもかなりの量のもので、時間をへて排泄されたものと判断し、さっそく店に電話して息子をよんだ。

入院した千恵は点滴の注入はうけていたが、近日にでも手術をうけられる様子はないようであった。丈二が係の医者にきくと、「いま検査しているところだ」と答えただけで、詳しくは説明してくれなかったという。太一が見舞いにゆくと千恵は案外と元気で、彼が軽口をたたくと、わらって応じたほどなので、食習慣の変化でおきた胃潰瘍なら、ゆっくり養生すればよいぐらいの、素人

判断をしてかえってきた。―この食事は喉をとおらない―などと病人の苦情もでたので、（千恵は別に思うことがあつてのことかもしれない）丈二はママエを一時家につれて帰ることにした。太一は退院の許可がでたものとはばかり思っていたが、そうではなくて、後日、娘の話で知つたのだが、千恵はすでに医者から見放されていたのだらう。助からない病人でも死ぬまえには元気づくと、一般にいわれているが、千恵は帰宅すると、わが家という安堵もあつてか、すぐにコップ一杯のつめたい牛乳をのんだ。千恵が産褥について太一が世話をしてから何年ぶりのことか、奥地にいた頃千恵が四人の子を生み、太一が世話をしたものだ。養生も十分にせず畑にでるような無理もしたが、とくにさわることもなく過ぎしてきた。千恵も老いたのだ。つぎつぎとこのように病が重なってくるのを、千恵はもうじぶんの行く先を予知して、口にはださなくても、形見わけのつもりでレース編みをしているのではないかと、太一はそつと妻を横目にみることがある。

太一は昼間から風呂をたてて千恵に入浴をすすめた。彼女は無類の風呂ずきで、一日も欠かしたことはないのに、十日の入院だったので、待っていたように起きようとするが、見た目よりは弱っていてひとりでは立てられなかった。太一は妻の腋の下に手をまわし、抱き抱えて浴室にはこんだ。寝間着をおとし、流し台にすわらせ

て、石鹸をぬり泡だて湯をながし、抱きあげて風呂桶に
しずめた。―ああ―、よい気持ちね―千恵はつぶやき眼
をとじて、新湯の肌にしみとおる感触をたのしんでいる
様子であったが、自分の身のなりゆきを、すでに予見し
ていたのではないだろうか。

病人に長湯はわるいときいていたので、太一は、
「もう、よいだろう」

千恵をうながし、抱きあげて風呂桶からだそうとする
と、湯につけたときとちがってかなり力のいる仕事に
なった。

「転んだらたいへんだぞ、おれにしっかりつかまっ
ていろ」

太一は自身に言いきかすように口にだした。千恵はパ
ンツだけの夫に接吻でもできるほどに顔をよせ、両手を
回して太一の首にしがみついた。太一は妻の尻に手をい
れて持ちあげ、風呂桶の縁から外にだし、まず流し台に
すわらせた。これで彼の役目はすんだが、太一の人差し
指が妻の臀部にふれているので、なにか惜しむ気持ちに
なりその感触をたのしんだ。このような性的な接触は彼
ら夫婦のあいだで、もう何年もたえていたものだった。
千恵は片手で夫の肩をたたいた。太一は思わぬ儲けも
のをしたので、つい冗談がでた。

「こんな世話なら、日に何度でもしてやるぞ」

千恵は仕様のない人だという意味か、わびしい笑いを

みせたただけだった。

夕食は太一がととのえた。粥に煮魚、豆腐の味噌汁など、千恵は機嫌よくたべて寝についた。これで収まってくれば、下血も止まっているというし、病人もしいに回復にむかうだろうと、樂觀して横になった。ところが夜半に太一は千恵によびおこされた。吐きたいと訴えるので、浴室から金盥をもつてくると、千恵はどつと一立もの醤油のような液をあげた。異様な臭いがひろがった。

太一は「えらいことになった」という衝撃もあったが、なるべく考えないようにしていたある予想が、ぱつくりと眼のまえではじけた恐怖につつまれた。事態は急変しているので、太一は廊下をはしつて息子夫婦の部屋の戸をたたいた。すぐに嫁の姉S宅に知らし、丈二は友人Eにすぐきてくれるように頼んだ。Sの娘で看護婦を勤めているI市の救急病院にゆくことにした。

千恵は息子に抱えられて単にのせられた。しかし、病人の意識はしっかりしていて、夜中にかけてくれた人たちに、

「こんな夜中に騒がせてすまんね」

千恵が礼をいっているのを太一はきいたが、これが千恵の声の聞きおさめになった。

「ママエはしつかりしている。吐くのも止まったから、心配はいらん」

朝方に帰宅した息子の報告に、太一は―病人は病院に任すよりほかはない、おれがここでいくら憂慮していても、なんの役にもたたん―とおもった。午後には嫁は見舞いにゆくという。このところ十日からも家にこもつていた彼は、女中に留守をたのんで、息ぬきに東洋街にいつてみようとおもいたった。注文しておいた本はもう着いているはずであった。

某日系書店の長年の客である太一は、店主と雑談していて気がつくと、いつも店にでていた老婦人がみえないので、―旅行でもしていられるのか―と尋ねてみると、意外にも主からつい先頃亡くなったと知らされた。その人は店主の母になるのか、あるいは姑または縁者になるのか、問うたこともなかったが、この時、姑になる人と知らされた。

昨年暮れもおしせまった頃、―よい新年を―と別れたのに、その人はもう忽然としてこの世を去っていたのは、太一は妻が生死のきわにたっているだけに、ひとしお寂しさが身に泌みた。

―そうだ、明日は見舞いにいってみよう―、太一は歩道にでて街路樹の下をすぎると掌ほどもある落ち葉が赤茶けてころがっている。太一は踏むほどの意思もなくすぎると、靴の下になった枯葉は、夏の陽にやかれていて、煎餅のようにカリツ―と音をたてて砕けた。

午後の面会にいつてきた嫁は、千恵の経過を太一に知

らせた。

嫁は樂觀している口ぶりで、――ママエは今夜あたり手術されるらしい――とも聞いてきた太一はなんとなく今夜が山場だという、迫ってきた胸苦しさをおぼえた。太一は千恵が病んでから不眠になやむようになった。眠れば気味のわるい夢や、逆境のころの辛い思い出、不和であった父親が夢にでてきた。その夜もうつつに誰かがおらんんでいるようで目がさめると。

「ママエが死んだ――」

と息子が呼んでいたのであった。壁時計をあおぐと、小の針は垂直にたち大の針は刻々と一本に重なりつつあった。太一はやはりくるものが遂にきたか、こうなるのは前から先見的に分かっていたという意識さえもつた。子供たちの積木あそびで、木片をつぎつぎと重ねてゆくのを眺め、不安にゆれる累卵の危うさが、高さにたえられずに崩れると、やっと安堵するあの心理に似ていた。けれどもそれは、――わたしが先に死んでみなさい、辛い目に会うのはあんたですからね――なにかの折に千恵は言ったことがあったが、太一にはなんとも無念な長くあとをひく心残りの始まりであった。

すべての手続きはすみ、千恵の埋葬はM市の私営共同墓地に、翌日のうちにといい慌ただしさになった。息子は家族の墓地として前から買ってあった。太一は初耳で

あつたが千恵は知っていたのか、どちらにしても彼ら夫婦のあいだで、そう遠くもないうちに彼らのゆく小さな地所について、話しあつたことはなかった。千恵は家に戻つてはこず、病院より墓地に運ばれ、遺体安置場で弔問客に会い、永の訣別をすることになった。

太一はどういうものか、父母をはじめ弟妹たちとも縁はうすい。長男なのに家を出たゆえだろう。おなじサン・パウロ市内にいても便りもなく、時に妨ねてきても四・五ねんの間はおいている。まして他州にいる者とは嘘のようだが二十年も会っていない。そんな縁のうすい男だから、父母の死に目にもかかわらずしまいになった。―あなたは人に懐かれんから―千恵はよく言つたものだが、妻の臨終も看てやれず、過言も聞いてやれなかつたのは、太一の一生の悔いとなつてのこつた。

太一はおれの死にざまはどんなものかと、そう遠くもない自分の死、主観のすべての消滅について考えると、やはり寂しい思ひは払いようもない。彼が血縁でもつとも身ちかく接したのは、祖父の死の床であつた。十歳ぐらゐの頃だつた。祖父が倒れて意識不明のまま床に就いていたのは覚えている。町から医者によばれ、家族のみまもるなかで、先生は懐中時計をだし病人の脈拍をはかり、聴診器を胸のうえにあてたのち、瞳孔をしらべ―注射をしておきましよう―父の同意をうながすように言つ

て、黒い皮のカバンから注射器をとりだし、薬液のはいったガラスの筒の先をポンとおり、器具にすわして祖父のうでに刺すのを、太一はめずらしいもののように見ている。医者はなにか父につげ、人力車で帰っていた。

「先生にたかい注射までしてもらったのだから、これで効かなかったら、寿命だわえ」

祖母はそう言ったものだった。その頃、庶民には病院などかかわりはなく、助からない病人も身内の者にかこまれて死んでいったようである。祖母は七十ちかくになつて移民となつて海をわたつてき、一家がコロノの不遇の時代に死んだ。太一の血縁のきずなは薄い、父からは勘当されている身だから、そのあたりは弟妹の思惑もあつてか、通知は両親とも死後にしか届かなかつた。千恵の場合はすこし違うようだが、結果としてほぼおなじことになつた。

親戚の者が留守をしてくれることになり、太一はさいごの車でM市にむかつた。そこは彼ら夫婦にとって、今日の礎をつくつた土地であつた。奥地で太一は病をえて、義父を頼つてきたのは三十年の昔になる。それは義父にとつてまったく裏腹の事態になつたわけだが、両親にも含むところのある千恵は（ある事情をしつていて、太一と結びつけた）見返してやるつもりで、それこそ昼

に夜に働き、やっと人並みの暮らしができるようになって土地だった。その埜域には千恵の父母は埋まっているし、知人のだれかれも葬られていて、M市は縁あって千恵の墳墓の地になったのである。

太一が着くと、R村にいた頃の旧知の人たちもきてくれていて、お悔やみを言ってくれたのは、家計にいくらかの余裕のできた頃、千恵は推されて村の婦人会長を何年かつとめた故の余徳だろうか。

そのうちに霊柩車が着いた。千恵の遺体は控え室に運ばれた。なにがしかの心づけを払えば、死に化粧もしてくれるという。やがてそこから千恵は寝棺におさまって、長い机のような台におかれた。燭台の蠟燭に灯がともされ、坊さんが席につき読経がはじまった。

多角形の屋根をもつかなり広い建物に、親戚、知人の会葬者がみちて、寂しくはない告別式になった。予定の時がきて、坊さんの一焼香をーという知らせに、喪主としての太一がまず線香をそなえた。千恵は棺におさまり上向きにねて、両手は胸のうえに組んでいる。

死に化粧が巧みだったのか、それとも体力をあまり消耗しないうちに死んだので、見たところ十歳もわかくみえ、老婦人のもつ品のよい美しささえあらわしていた。けれども太一は一目見たとき、これはもう千恵ではないと思った。蠟のような質料で精巧に作られた人形のようなものに感じた。つまり命のないもの死者ということだ。

あった。死とは生者の目の前に闇の幕がおりるといふことではないか、死者の感覚のすべては消えて無になり永遠の闇にはいつてしまうと、太一は日ごろそのようなかんがえている。

太一はこれが千恵との別れになるという意味で、妻の額に手をおいた。しかし、とくに胸に迫ってくる悲哀はわいてこなかった。かえって、一期一会は夫婦の仲にあつてもよいはずなのに、千恵が病んでからもついうかうかと、すごしてきたのが悔やまれるのであつた。死者は彼にかかわるすべての存在とともに、永遠の忘却、絶対の無になるのだから、そこには喜怒哀楽もないわけだが、かえつて残された者が辛い余生をおくらなければならぬだろう。見送った者もまた見送られるのは、人生のさだめだが、太一は千恵のいった路の跡をやがてゆくのだとおもうと、そう恐れることもないとも考えた。

このような感慨はわずかの間、太一の脳裏にすぎたもので、死者を前にしてふかい瞑想から得たものではない、埋葬の時刻は決められてあり、つぎつぎと焼香をまっている人たちが列にならんでいた。

千恵の埋葬はすみ、太一の帰宅した刻はもう夜になっていた。到着にいくらかの差はあつたが、縁者がそろつたところで軽い夕食になった。七日忌の法要の取り決めなどすましてそれぞれに帰っていった。

息子夫婦は部屋にこもってしまい、孫たちも物音ひと

つ立てないでいる。母と共に苦勞した丈二の心痛のほどは、太一も察するが当分のうちは千恵のことにはふれな
いでおこうと思った。

けれども、太一にはそんなわけにはいかないだろう。千恵の発病、入院、一時帰宅そして容態の急変で救急病院への搬入、わずか二日の経過で死んだ。千恵の疾患は急坂をころげおちる石塊のように慌ただしかった。そして彼女の命の根を絶つてとまった。

千恵の死について、太一は―もしや―という懸念はあったものの、そのような不吉な予想は考えたくはなかったし、なるべく意識しないようにしていた。

過去に奥地にいた頃、千恵はとっぜんの流産で出血がとまらず、イタリア人の精米所の車で町まで走つてもらったことがあった。あの時の状態はこのたびの吐血どころではなかった。また屠殺した豚の内蔵を彼女が処理したのち、腕がだるいと言うので太一がしらべると、血管は赤くはれて腕をのぼってゆくようすなので、その時もすぐ医者にはしつてゆき、ワクチンを打って、危ないところをのがれている。その他にも、千恵の予感で背筋の寒くなるような危機をはずしたこともあって、太一は妻の運勢の強いのを、理由もなく信じていたのは、日頃、彼が口にする哲学うんぬんとは理にあわないのであった。折にふれ自分の死については考える太一も、妻

の死を予想できなかつたのは迂闊で、入院の翌日見舞いにいっておれば、言いたいことのひとつも聞いてやれたのにといい悔いを、太一は生涯にわたつてもつことになるだろう。

太一は夫婦の部屋にこもり、寝台の縁に腰をおろして、まとまりのない考えにふけた。

寝台の頭をおく側に枕が二つならんでいる。わずか三日まえまで千恵が頭をおいたところなのに、今夜はもうその者はいない、いままでにも太一はおおくの人の死に会ってきた。―すべての人間は死ぬ、知人Aは人間であつた。それでAは死んだ。で片付けてきたが、千恵の死はその帰納法では納得できないなにかがあつた。

太一は重い頭で、千恵との過去のさまざまなことを想いめぐらしていると、
（―あんだ。もう休んだらどう、夜もかなり更けているのに―）

妻の声を聞いたようにおぼえた彼は我にかえつて、おもむろに腰をあげた。いつもはきちんと畳まれて、枕もとに重ねてある寝間着はない、太一が朝おきて着かえたのを、まるめて洋服タンスになげこなんだのがそのままである。こんな日常の些細なことにも、胸の中にすわったひとり身の落莫をおぼえた。

太一は麻の背広服をぬいでハンガーにかけてみて、な

にか違和感をおぼえた、千恵はいちど着たものは襟の汚れを気にして、そのままではけつしてダンスにしまわず、仕事をとりにくる洗濯屋にわたすのを思い出したからである。上着をきてゆくほどにあらたまった場所に、彼はしよつちゆう招かれるわけではなかったが、招待をうければ欠席のできない義理あいの場合もいくらかはあったのである。ところで、千恵のいう洗濯屋からもどってきた清潔な服をきて、夫がゆくはずのつぎの場所とは何処だったのだろう。人は自分の明日を知ることとはできないとはいえ、それは自分の死出の旅を送る夫への用意ではなかったのか、そこに太一が思いをさせた時、命あるものはかなさ、妻の哀れさに、はじめて悲しみがどつと胸にあがってきて、太一は慟哭に身をまかして寝台にうつぶした。

丈二は翌日、母を診た医者に会いにいったが、その医者は多忙でついに話す時間はもらえなかったという、それで千恵はなにの疾患で死んだか分からずじまいになった。死亡診断書には呼吸困難によってとあるので、心臓がよわってきたのか、よく痰を喉につまらせる体質だったので、それが原因になったのだろうか、手術はしたというが、ただ開いただけではなかったのか。家が焼けて火事の原因が究明されても、灰になったものは元にもどらない、千恵はそれだけの寿命だったと、諦めるより仕方

はなかった。

葬式は仏式にしたのも、嫁の兄の世話によった。彼は二世だったが太一などよりも古い日本人の俗習にくわしいので、すべてを任せたのであった。

太一の日常には宗教的な行為はない、厳格な言行一致では、彼のような無信仰の者は無宗教で葬儀をいとなむのが正しいだろう。ところが日本の社会主義者の墓なども、たいていは寺院の境内にあるときく、それにはまた事情もあることだろう。

千恵は宗教には反対ではなかったが無関心のところがあった。彼女はもともと死生観とか、神仏に頼るといふ気持ちはうすかったようだ。またそのような話題はすきでなかった。千恵は自分の運を信じている傾向があった。事実みずからたのむにたることをなしとげていたので、隠居の身になってからは、頼りにしたのはともに苦労してきた息子であった。

太一は自説をおして、妻の葬式まで無宗教でやる気持ちにはなかった。後日聞くかもしれない変な噂は嫌なので、すべてを世話人に頼んだのであった。七日忌、四十九日忌もすませた。坊さんは「自分は移民の出だが、何ヶ月かは高野山に修業にいつてきた」と話した。

檀家でもない松山家の葬儀をとりおこなってくれたのに好感をもった。「朝夕のお勤めを欠かさないように」といって坊さんは白木の位牌をおいていった。表には

戒名が記してあり、裏には故人の生年月日と俗名が書いてある。太一はそれを机のうえの棚においたが坊さんに言われた祭事はおこなってはいない、位牌は千恵ではないし拝む気持ちになれない、千恵は死んだ。もうどこを捜しても再び会って、話し合うこともないのだ。

覚者はそれを迷いというだろうが、太一はこの迷いをいつまでも持ちつづけなければ、いつか地平がひらけるだろうと考えた。

死者は永遠の無に帰して歳はとらないが、命あるものはそれぞれの生き方を生きなければならぬ、例の坊さんを招いて四十九日の忌をしたあと、太一は千恵の残っていた品々を客間にはこんだ。長男と長女は母の世話はできたが、次男と次女は日本在なので、(いまのうち)に一目会っておくほうがよい)とでも、太一には知らさず長女が電話をしていたのか、二人は急遽飛行便をとって帰ってきたのに、母の死に目には会えなかった。

二人とも母の見舞いということに貫った休暇なので、そう長い滞在はゆるさねず、初七日の忌がすむと職場にもどっていった。その折、母の形見わけとして指輪と時計を渡した。それでもまだかなりの品々が卓上にならべられた。その場にいあわせた者がはやくも目をつけて、手を出したいほどの金目の品はない、太一の贈ったものは一つとしてないが、折につけて千恵が自分でもとめ

たもの、嫁から贈られたものなどがあつた。

縁のふかい者から、収めていった形見の品は、安価なものまで全部わけられた。服は何十着とあつたが、柄が地味なのか、ほかに理由があつてか、だれも手をださないで娘がひとまとめにして、近くにある老人の施設に寄付するという。それにちよつとした驚きは十足からの靴がでてきたことであつた。千恵のはすべておおきくて、だれにも合いそうもないので、それらはすべて屑にだすことにした。

いちおう形見分けがすんで、あとは故人の思い出話になつた。長女の姑は千恵の見舞いにいつてくれていた。

「いまだからいいですが、わたしは千恵さんの変わりようにびっくりしました。これでは助からないのじやないかとおもいましたよ」

つづいて丈二の友人のEは、

「おばさんは寂しかったのですかね、自分の手にするよう握ってこられたので、うあすはおじさんがこられますよー」

そう言つて慰めますと、

「パイのことはよくわかっているから」

とEはきいたという。

太一はこの千恵の言葉が、脳裏にやきついていまだに忘れられないでいる。Eへの答えにこめられた彼女の思ひは何だったのだろうか。太一の性癖で妻の心理分析を

こころみた。

一、パイはわたしのことなどすこしも心にかけていないので、わたしの身の上がどうなるうともかまわない。
一、パイは大切なことほど、ぐずついて後で後悔する性なのだ。

一、わたしたちが所帯をもって、夫がいてくれれば力になると思う時に、家長のいたためしはない。

このように太一は三項目にあげてみた。これは折にふれて妻に聞かされていた不平なので、千恵の心境からあまりはずれてはいないと推定した。ところでこの三項目のうちで、どれに重きをおくかについて、思いをめぐらしたところ、千恵ははじめの項目に恨みをかけたように彼は思えた。見舞いにいった者の安易な報告に安んじて、長女が日本へ母危篤のしらせをしているのも知らなかったが、あの日、セントロへ雑用にゆかず、なぜ妻を見舞わなかったのかと、後悔の念にせめられた。おれたち夫婦は五十年にちかく、悲喜ともどもに身にうけて暮らしてきながら、ついに心は通じあわなかったのかと、太一は慄然として自分の孤独を知るのであった。

四十九日の法要はすみ形見分けもすんだのに、太一は千恵のいない日常には慣れそうにもない。妻の不在という現実には屈しても、一日のうち何処かで何かで考えごとをするとかならず千恵がかかりあっているので、時に

は不安にゆれる日もあったし、折には錯覚幻影にあったこともある。

太一らの夫婦の部屋は二階の東がわにあつて、窓からはカルモ自然公園がながめられた。

この部屋に寝起きして十年、千恵の匂いはすぐにはぬけそうもなく、太一が室にはいると、千恵が寝台の片側で横になっているような幻視さえみた、時には扉の取っ手がゆるんで、風におされてコトリと戸がひとりで開いた折などは、千恵がはいってきたかと感じることもあった。妻の没後、太一は夢で二回ほど会っている。千恵が寝台のわきに立って、レース編みの糸玉なかつたかしらと太一に訊き、洋服タンスの鏡の下の棚を探しているようであつた。太一が夢からさめると、当然ながらそこには誰もいなかった。千恵は彼に後ろ姿をみせていたので、太一があとで輪郭づけようとしても、なにひとつはつきりとした映像にはまとまらないのであつた。

またこんなこともあつた。これは夢ではなかつた。二人の閨房での永年の習わしが、ひとつの幻想になつたのだろう。彼は夜冷えをおぼえて、千恵のよこに身をよせていった。すると柔らかな肌の感触があつたので抱きしめると、それは崩れて抵抗のないものになった。太一が妻の肉体とおもつたのは、ただの布団の重なりにすぎなかつた。もう朝はあけており、寝起きのにごつた頭ではなく、はつきりとした空しい寂寥の気分におそわれた。

彼は自分のこのような幻想は、かつて読んだことのある。上田秋成の『雨月物語』のなかの一篇―浅茅が宿―に似ているようにも思った。すでに故人になった妻に、夫として哀情の情をいだくのは当然としても、自分のような歳をして、ただの観念としても性欲の相手をもとめるのは、妻であった女とはいえ、死者だけに罪ぶかひものと観した。

これもひとつは環境の影響もあるうかとも考え、太一はインテリアの改装をおもいたった。

出費のこともあるので、息子に相談すると、―パイの好きなように―と賛成してくれたので、寝台も独り者用にかえ、一方の壁を本棚にして、物置につんであった蔵書を部屋にはこんだ。壁が本で埋まると、それだけでも部屋の感じはまったく変わってしまった。

「あんた。とうとう自分の思うとおりにしたのね」

と千恵の声をきいたようだった。彼女の本心では、太一のような男は好きでなかったにちがいない、千恵も世のなかの娘とおなじように、結婚に夢のようなあこがれもあっただろうが、夫に女があったこと、父との折り合いがつかず、夫婦は無一文で家をでたことなど、千恵には予想もしなかった不運のしかかってきた。太一の前歴がわかったとき、彼女はトランクひとつを提げて、家を出しようとしたこともあった。夫婦のきずなといっても太一らは、揺れる台のうえの素焼きの壺のようなもの

で、よくも落ちなかつたものだど、妙な気持ちになることもある。

たぶん千恵には夫は馬のあわない、ずいぶんと自分勝手な男だつただろう。けれども彼女は夫になんの後顧の憂いのないようにしておいて、黄泉への旅にでていった。

宿世の縁 二 (続)

松山太一は、ひと月ほど前に、亡妻の一回忌をどのように行なうかについて考えていたのに、息子からその件について聞かれたときは、すっかり度忘れをしていた。彼には折々このような現象がおきるようになっていた。いまさらのように慌てた太一は、前にも世話になつた嫁の兄に、坊さんの都合をきいてくれるよう頼んだ。千恵の命日は坊さんの旅行の日程とかさなるので、帰つてからということになった。日がきまると太一は疎遠にしている弟妹たちに、一おうは法要をしらすことにした。

父より義絶されている彼は、一許すーとの父のことばのなかつた以上、総領ではあるが、出来物そろいのなかの半端者として、出てゆけよがしの扱いに、分家を願ひ

でたところそれもゆるされず、ついに勘当までされている身ではあるが、千恵の死にさいしては知らぬ顔もできないと思つて、妹（やりとり婚で故人の弟の嫁になつてゐる）との義理の縁によつて、ほそぼそながらの交際があつたので、一おうほかの弟妹たちにも知らせてくれと頼んだのが、後をひくようになったのである。

法要は平日で午後七時という事情もあつてか、太一のほうは故人の弟のほかは誰の出席もなかつた。なにも含まれるところもない千恵でさえ、この有様ではおれの場合とは、つい太一は苦笑がわいてくるのであつた。

けれども法要は寂しくはなかつた。年寄りもまじつて嫁がわの人はみんなきてくれた。たいがいは二十代の若者で、派手なシャツ一枚できている者もいて、今夜は何の集まりか知らないのもいるようだった。その中にRもまじっていた。無作法だと千恵からたしなめられた青年で、半年ばかり日本に行つてきて帰つてきたばかりだった。太一の前にきて、何が言いたい様子だったので、

「婆ちゃん、もうおらんよ」

と太一は声をかけた。

「うんー」

Rは口下手なところがあつて、うなるような声をだすと、自分の態度のとりようにも困惑したようで、太一にちよつと頭をさげて仲間の群れにはいつていった。形式

だけの悔やみの言葉よりも、Rの愚鈍ともとれる肯定のほうで、寂寥の滴となって太一の胸にしみた。

「はやいものですね、千恵さんが亡くなってから、もう一年になりますか、今夜はお線香をお上げしたいと思わせてね」

などと挨拶をする年寄りには、嫁がわの縁につながる人で、千恵が在世の頃ちよくちよく来ては話をしていた老女であった。

死者に関するすべての行事には、ほんのわずかな人々の他は、心底にかすかな喜びを秘めて臨むといわれるが、この法要も会食の場になって騒然としたものになった。生前の千恵は賑やかなことが好きで、なにかと意味をつけては人をよんでいたもので、これはおれの供養になったほうが柄にあうのではないのかと、太一は思ったものである。

太一は自分らの五十年ちかくの、千恵との結婚生活は何だったのかと、回顧してみると二人で演じた芝居はどうあったにしても、片方のかけた現在では、すでに幕のおりた舞台とおなじで、演りかえのできないのに太一の心残りがあった。

ずっと以前に、ブラジルでも巡回公演された、ひとり芝居「土佐源氏」を太一はわすれられないでいる。錦繡のぼろをまとった橋下の乞食芸人のかたるテーマは、

身分や財産にかかわりのない人間の真情のふれあいである。

この乞食は若い頃、馬喰をたつきとして世間をわたっていた。その間にかかわりあつたかずかずの女たち、どちらかといえば身分の上のおなごとの遍歴の物語である。―わたしは何人ものおなごを好きましたし、また好かれましたが、だれ一人としてうらみに思われたことはありません。この世で夫婦になれなかつたのは前の世のさだめとしても来世ではかならずみようとにと泣かれたものでございます―。

真実をつくし、相手の気持ちになり喜ばれるようにすれば、おんなはなついてくるものよと人の世の情けをものがたる。

太一はその時は馬鹿くさいとふかく気にもとめなかつたのに、何故か忘れられないものとしてながく印象にのこつた。

太一の場合には年代も場所もおなじではないが、彼の半生に似つた女ふたり、はなと千恵とは容貌、気性、体格など似たところはすくなかつたが、はじめの女に逃げられたほどの男だから言わずもがなながら、千恵とは四人の子までなし、生涯をともにしながら太一はついに千恵の本心は知りえないままにすごしてしまった。

うまくゆくはずのはなとは不縁になり、千恵とは別れる理由は（彼女の言い分として）正当すぎるほどあつた

にもかかわらず、太一とは生涯をともにしたのであつた。それは人それぞれの定めだとしても、それならなぜ初めから千恵とむすばれなかつたのかという疑問は分からないままに残つた。

世話する人があつて、太一ははなと結婚した。三カ月ばかりいたがすこし養生をしたいといつて、実家に帰つたままに戻つてこなかつた。その後、先方からいちどの苦情だけで内縁でもあつたのでそのままになつてしまつた。一年ほどたつてはなは再婚したとの噂がたつた。彼女はどんな男の許にいったのか、太一は今日にいたるまで全くその消息をしらない、もし生存しておればもうよい年の老婆であるが、現在どんな境遇にあるのか、回顧すれば短いように思える太一の過去も、たぐつてゆけばそれからそれへとおい地平につながつていたのであつた。それにしても彼がはなの顔立ちを想いうかべようとしても、その輪郭さえも脳裏にういてこないのがあつた。

これは一つの妄想にしても、日系人のおおいI区の朝市などで、太一が昔の女とすれちがつても、おそらく両方とも相手が誰か見分けられないだろう。縁あつて嫁いできた娘がそれも世間知らず幼気ののこつていような者が、初めての男から去るとは、女のほうでよほどの不信感があつたのだらうと、後日、彼はあれこれと詮索を試してみたが、要するにおれは嫌われたのだと解釈した。

そういえばおおまかな気性の千恵でさえ、

「おなごであんたのような人を好きになる者は誰もいませんよ」

なにかの折、千恵は虫のいどころがわるかったのだらう、つい思いきった言葉をはいたことがあって、太一はいまもって忘れないでいる。

これは一つの仮定としても、はながしぶりながらも婚家にもどっていたら、太一の前途も変わったものになっていただろう。父との不和がこうじたとしても、はなを頼んでの家出なら彼の決意もためらわれ―そして蓋然性は半々だったので、現在弟がやっているような仕事をG州でしていたかもしれない、もしそうだったとすれば、太一は意思はかなり強くても、情愛にはうすいので、苦勞しらず思い上がり者のような男になり、父以上の横暴な家長になって、事あるごとに女房に辛くあたったのではあるまいか。これは一つの仮定のようで、案外と実証性のあるように、太一自身が認めるところであった。

太一は自分では偏屈とはおもってはいないが、どういうものか人からは好かれないのであった、母は好いてくれたが、父からは嫌われ、弟妹たちからは疎んじられた。そしてはなからは逃げられている。

もしこれが、はなの不縁が平和の時代だったら、それを機会に太一は家を出ていただろう。ところが彼が望んでいた大都會では、身のおきどころのなくなった邦人

が、つてを求めて田舎に転居してくる時勢だった。太一はこの戦争がすまなければ、自分の生活の方針もたたないと思っていたが、日本が国策をあやまつたとする考えはしだいにつよまるばかりであった。

事の真相などは、たとえばはなの場合などは、本人が本心を語らなければ分からないものだが、夢やぶれて女のほうから破綻にするには、それだけに深刻な理由があったのだろうと、太一は反省したものだだったが、彼も歳をとるにつれて、いくらか観察かかわってきた。というのも案外と些細なことから、人生の流れがまったく変わってしまうことのあるのを、自他ともに経験したからであった。しつこいようだが彼はその件について、折につけては探究をしてきた。そして近ごろになって、他人の話とか「土佐源氏」の主人公にくらべてみて、はなとの仲がうまくゆかなかったのも、観念的な男が畳の上で水泳の練習をして、実際に水の中に入り溺れかけたという失態をえんじ、自分をよく見せたいという女の前だけでなく、落ち着きをなくしたのが行為となつてあらわれ、新妻のうぶなところに不安をうえつけたのが、不縁の因になったと彼は悔いた。

太一はかねてから男女の結合は、はじめに愛がめばえむすばれて、家庭をもつのがこの国の習慣でもあり、理想としていたが、当時のコロニアの邦人には望まれない

事情にあつたので、床をともしれば情愛がうまれ、家族をなすのもひとつの型と観ていた。

はじめに交わりがあつて、すべてがその後につづくと、太一は思っていたので、その意義はおもくかんがえていたが、行為そのものは性欲の発現で、動物とかわりのない本能の一つと彼は思っていた。

農村などでは日常のこととして、まい日眼にする禽獣のあの行為である。子豚など放し飼いにしておくと、生後半年ぐらいで、おなじ腹からでた牡と牝が遊んでいるうちにはらんでしまう。飼い主はおこつて、一こんな親からろくな仔がとれるかい、と牡は去勢され、牝は屠殺される。

もちろん人間は禽獣ではないが、交接は飲食とともに生物の本能のひとつ、逸樂しやすい安易な行為と太一は考えていた。ところが、彼は初夜でしくじった。床にはいつて処女の柔らかな手をにぎったとき、感電したようにしびれた。そんな男がまんぞくに性交のできるはずはなかった。太一は日ごろ己れを高く持っていたので、恥をかいたと思った。誰もはずかしめたわけではないのに、自信をうしない茫然と落ちこんでしまった。

かたや新婦にしても、新枕をかわす床にはいるのに下穿きもとっていないかった。さきはど形だけの式をすませた男が、自分の上にあららしく乗ってきて、何かをしようとするので、新婦はどんな目にあわされるのかと怖

くなり、脚をちぢめ身もかたくしてふるえていた。

今でこそ年老いた彼はあのころの自分をなつかしむが、当時は深刻に焦慮して、おれは不能者ではないのかと悩んだ。新妻の下腹をぬらすだけの夜が三晩もつづいたのち、この度はと心をしずめてよってゆくと、意外にも彼の手ははらいのけられた。強いて抱こうとすると、相手はくるりと横になりこちらに背をむけて丸くなった。これはてつきり失敗つづきなので、はなに嫌われたと太一は推量した。これで自分らの縁はおわりだと思うと、足もとに亀裂がはしり深淵に転落してゆく気持ちになつた。

ところが、それは太一の思い違いで、彼は女性には月経のあるものしらなかつたが、はなもそのことは言わなかつた。このように為すことすべてがちぐはぐな夫婦であつた。いく日かたつて女のほうから、男の手をもとめてきたので、太一は嬉しくなり不安がうすらぐと、今夜こそはと自信がわいてきた。はなも自分なりに考えたのであるうか、柔らかく男をむかえる姿勢になつていたので、太一が接するとアツとみじかい叫び声をあげた。

行為がすんでみると、失敗をしていた後だけに、一なんだ、こんなことだつたのかーと一時に馬鹿くさくなり、これからのながい生涯におなじ行為の繰り返しかと思うと、太一は結婚などなんのためにするのかと疑問にした。

ところが破局は意外なところからやってきた。ある朝、はなが床にうずくまって泣いているので、訳をきくと、体調がわるいと言う、それでは実家に帰って養生するかと、送っていったのがそのままになったのである。なんとか男女が共に暮らしてゆくうえの、条件がととのったところで、太一らの縁は砂の城のようにくずれてしまった。日をおいて、先方から仲人をつうじて、感情的な抗議があった。短気な父は怒ってしまったので、二人の縁は望みのないものになった。

太一は中年になって、千恵の気質の影響もあずかつて、人柄もいくらかは軽くなり、ときには下手な冗談も言うようになって、若いころはむつつりだんまり屋で、後日になって想いだしてみるに、はなとはまとまった会話さえしたことは一度もなかった。はなはとてもこんな男とは一生添えられないと決めたのかもしれない。しかし、太一はこと良かれと妻の望みをきいてやったのが裏目にでたのであった。もし、あの時しらぬ顔でほっておいたなら事態はどうなっていたか。

事にあたって積極的にでるか、消極的にじつくりと構えて、自然の成りゆきをみるかについて、折につけ太一は考慮するところがあった。

太一が老境にはいり知ったある友人と雑談をかわしているうちに、結婚まえの素行に話がおよんだ。友人は熱

心なキリスト教徒の母より、子供のころから薫陶をうけて育ち、生涯かけての信者であった。太一は興味をわかして、友人の婚前の素行についてたずねたところ、―女は家内がはじめてで、おわりでしよう―と笑って答えられた。もう故人になられた奥さんに、結婚を申し込まれたときの面白い挿話をきかしてくれたが、友人は太一とおなじで異性しらずで、ある感情をもって若い女の手はにぎったことはないとも言われた。

婚約がなっておなじ信仰の家の娘だったので、教会で挙式して夫婦になったが、なん日かは奥さんが嫌がりはしないかと、男女の交わりは差しひかえていたと言われた。すると奥さんが―わたしたちはご夫婦になったのですから、お勤めをいたします。―と誘ってきたと言われ、はじめての交接の模様をきかしてくれた。人によっては幼稚な男と女と冷笑するむきもあるが、どうしてもその知人は家業を興し、子弟にも大学をおえさせている。立派な人格者であった。日ごろ尊敬している友の告白だけに、太一はガン―と頭に一発くわされた衝撃をうけた。

太一は小心者のくせに、見栄張りで、他者には良く見せたいというくせがあり、思ったとおりに事がゆかない場合は、あわてて落ち着きを失う性格なのは自認しているが、彼は肉体の関係は家庭をなしてゆくうえで、試験にすれば初日にあたり、ぜひにも難なくとおれたかった

のに、それにつまづいたのが破談のもとになったと考えた。愛なき者の婚姻の悲劇であった。それにひきかえ友人は、神によつて結ばれた縁は、人為によつては離せないという堅い信念よりきているように思えた。万事ことにあたって静かなること林のごとしという心境に太一は打たれた。

これは追憶もかすむほどの遠い過去になるが、はなは自分の選択した道をえらんだのだし、太一も自分の当為をなしただけであつた。過去は偶然にしても必然にしても、書きかえられるものではないが、人から虫のようなものまで、その時の状況によつて生きられる最善の途をえらぶというのは、おそらくは真実であろう。

太一らの仲もどちらが悪いというわけではなかつた。どちらも世間しらずで大人でなかつたのがおもな理由であつた。

一年ほどすぎて、はなが再婚したというのを太一はきいた。すると間もなく、ある人が太一に話をもつてきた。父もよろしくと頭をさげたので、彼も承知せざるをえなくなつた。

すると仲人は先方は初婚だといった。太一は―そんな娘がおれのような前歴のある男になぜくるのか、手におえないあばずれではないのか―と疑つた。ところが仲人は先方はちゃんとした娘で、こちらのことは承知してい

るから、済んだことは黙っていてくれと念までおされた。娘の家は同じ郡内の日系人の某耕地の借地農をしていた。太一が初婚ならこの話に父はのらなかつただろうが、不肖の息子として世話人によるしくと頭をさげたのである。先方の含蓄あるのも腹にのんだようであった。

話はすすんで、M市のペンソンに両家がよって見合いをした。千恵の器量はよくなかった。愚鈍の相ではなかつたが、美人になれる条件にかける容貌であつた。けれども体格はよかつた。身長も太一よりも上らしかつた。彼は千恵をみて、娘に異存がなければさきざき連れそう女房になると思えば、女子選手のような堅い肉をもつたこの女は、随分と役にたつてくれるのではないかと、太一は感じたものだった。千恵の気性ははしつていふようだった。献立は和食ふうにでたので、吸い物と焼き魚、そのほかの皿に、ご飯はお櫃にはいつてきた。千恵はすぐに仲人さんの茶碗をとつてわけ、太一の父と母そして彼の世話までした。太一に顔をよせてきたとき、赤くなつたのはこの人という想いがあつたからだろうか。

後日、太一がそれを言うと、千恵は「わたしは騙されたんですよ、なんにも知らされずに」とむくれたので、太一は二度とそのことは口にしなかつた。

話は順調にすすんで、父は結納をおさめたので、太一らは夫婦になつたが、戦時中というので式は挙げないこ

とにした。それに嫁側では今は農繁期で娘をとられると困るので、収穫がおわっての後にということになった。けれども太一が通ってくるならそれは認めようとの話にきまった。表むきは理にかなっているようで、なんとなく親たちが細工したような変なところがあるのに彼は気づいていた。

同じ郡内だったので、戦時中の旅行証明書もいらず、千恵の家は馬でゆけば二時間ぐらいの道程だった。太一は土曜日の昼からでかけ、日曜日の夕方には帰る通い婚のようなことをやらされた。嫁側ではゆくゆくは頼りにする婿として大事にされたが、太一はお客ではないとあって、力仕事などもすすんでした。彼は嫁の里のほうがいいと考えたほどだった。

それも初夜がうまくすごせたからであった。床にはいと千恵のほうより積極にでてきて、太一の手をとって自分の乳房にあてがい、一可愛がつてねーと甘えた。太一はなんの不安もなく官能の喜びをあじわった。ひとりの娘を女にした満足と、こころよい疲労でぐっすり睡眠った。

朝の光がそまつな借地農家の椰子樹の壁のすきまから、いく糸もの縞になってさしこんでいた。太一が目覚めると千恵はすぐに床をはなれようとした。羞恥で顔もあげられない新妻をみて、彼はあらたに情欲のふきあ

がってくるのをおぼえると、千恵にだきつき床のうえにおしたおした。

わずか半年ばかりの間であったが、彼が馬で千恵のもとに通った頃が、丸五日おいた逢う瀬だけに、もつとも好色な月日であった。初夜からひらけていた女だけに、太一の誘いにはしたがうし、はやくも官能の喜びをしつて、後をひこうとさえした。

ある夜、ことが終わってからの寝がたりに、

「あんた、わたしが初めて」

千恵は太一にきいた。

これで千恵はなにも知らされていないのを太一は知つて、困ったことになるぞと思つた。夫の過去があらわになれば、気性のかつた女のことだから、一騒動はまぬがれまいと予想したが、その時はその時のことだと、ほぞをかためたのであつた。けれども千恵が婚家にはいる日が近づくにつれて、太一ははやかれおそかれどちらにしても、自分の過去が知れずにすむわけはないので、それを思うと憂鬱になつた。千恵から―あんた、なにか心配事でもあつて―と訊かれるほどだった。この件がもし可能なら父から資金をたしてもらい、戦争もそう長くはない状態だし、どこか彼の過去を葬つてくれるとおい土地にゆきたかつた。

それはとうてい父が許してくれるはずはないので、太一はいくらか自暴自棄になり、なりゆきに任そうと覚悟

をきめた。千恵はおおきな腹をかかえて婚家にはいった。

千恵は何処にいつても、誰ともすぐに親しくなれる気軽さがあつて、すぐに裁縫の手があるのをしられて、近所の外人の晴れ着の注文をとるようになった。一カ月たつても口さがな女たちが、太一の過去を千恵に告げなかつたのは不思議なほどであつた、これは千恵がすべてを承知して、太一の嫁になつたと決めていたのが理由らしかつた。

ところがくるものはついにやつてきた。千恵がうけた服を隣家のイタリア人にとどけにいつてその婆さんがつい口をすべらして、なにもかもが明かるみにでてしまつた。

その日、太一は畑に山盛りにしたままの玉菊黍を運ぶため、馬車で山にいつていて家にいなかつた。千恵はわあわあ泣きながら家にもどるなり、片手にトランクをさげて家を出ようとした。すると父が戸口に立ちほだかつて、

「いま、お前に出られると、わしは首を吊らにやならん」

と言われ、戸口で土下座されたという、それは父のその場かぎりのはつたりにしても、千恵は氣落ちしたようになつて、茫然とその場から動けなくなつた。太一が山から帰つてくると、千恵は彼にトランクを投げつけて、

「ひとを騙しておいてー」

と叫ぶと、ヒステリをおこして泣きわめいた。このような騒動はおおぜいの弟妹たちからみれば、一つの喜劇でさえあった。父も嫁にたいして変な立場になったが、それだけに息子への憎しみがより深くなった。また彼ら夫婦も仲直りするのに、永い日々があつたが千恵の下腹は目にみえてふくらんでいった。

「かわいそうに、この児なにもしらないで、あばれて
いる」

千恵は夫の手をとって、自分の腹にあてがった。そこでは一つの命が育とうという意思で、母の胎内でおどつていた。太一はつい感傷的になって泣けてきた。泣けてしかたがなかった。これで夫婦の仲はおさまったようであつたが。千恵は一生この傷痕を石のように胸のなかに持ちつづけたようで、夜の床でももう前のような身をなげだしてくるような情熱はみせなくなった。

それから半年ほどして、日本はついに負けた。制約は解かれ旅行なども自由になったが太一はすこしも嬉しくはなかった。われわれは亡国の民になつたと思つた。頼れるのはひとりひとりの財産だけの時代がくるだろうと考へた。

間もなく日系コロニアでいわゆる勝ち負けの騒擾が起きて暗殺者までだしたが、太一夫婦にとってはその頃が

一番安泰な時期であった。外が騒がしいだけに家の中の問題はおきなかつたのであった。

戦後日本人の移動がはじまったとき、千恵の実家はサン・パウロ市の近郊にうつるについて、太一らの仲人をつうじて、千恵の弟に太一の妹をということになり、それて話はまとまったものの、太一はまた一つ父から恩をきせられることになった。

松山家は幾らかの資金はもってきたものの、はじめから地主になるには不足だったので義務農年をすますと、S町のはずれで荒れ牧場をかりて綿をうえた。それが二年つづけて当たつたのである。そんなわけで太一らは移民のおおかたのあゆんだ道程、山奥に入って原始林を伐りひらいた開拓者ではなかつた。つまり町すまいの百姓であつた。

ブラジルにきて運がよかつただけに、悪い耕地にいれたれた者や、病人などがでて思うようにならない家族には、父は同情などはなくて甲斐性なしと言つた。

太一の父が借地した地主は、毎日ごろごろして働く気のまつたくない息子と男あさりのほかはよねんのない娘に、遺産をのこしてやる気持ちはなく、戦争になる前に二十域を松山家にうつたのである。終戦の頃、一家は唐胡麻（マモナ）と落花生をうえていたが、それらの作物に頼つていては前途の見込みはないようであつた。

当時、日系コロニアはパラナ州に移ろうとする流れが

あった。けれども、太一はおおきな潮流にのるのはさけて、麻州（注・マツト・グロツソ州）はどうかと考えていた。州都のカンポ・グランデには沖縄県人もおおくいるというし、州政府の払い下げの土地もあるときいた。

ところが父は反対した。口ほどにもなく生活の変化をおそれていた。交通不便な奥地にゆくのではない、とうざ一家は町ずまいして、太一は仕事をさがすし、千恵も仕立ての看板でもだせば、彼女の気軽さでお客はつくだろうし、一家の生活にはなんの不安もないように思えた。この案には次弟も賛成した。ところが父はこれは太一の発案とみて、頭から反対した。―そんな山奥にゆけるか―と言うのであった。父は―お前がゆきたければ、勝手に行け―と言う始末で、訳のわからない年寄りになっていた。

後日、太一が回想してみるに、あの時、一家をあげて麻州に移っておれば、成功または不成功は別にしても、長男の家出は避けられただろうし、父も早死にはしなかつただろう。

弟妹たちはいまでも、兄が父をころしたように思っているようだが、そのような言い分がおるなら、千恵なども流産で死んでいただろうし、太一も中年になって心臓を病んだが、父が財布をにぎっていたら、一家の邪魔物として、とつくに墓にはいっていただろう。

これは彼のひねくれた妄想ではないのを、不具でうま

れたつぎの児が、太一夫婦の将来を暗示してくれた。その児は臍の緒がしまつていかなかった。乳を吸う力もない虚弱児であった。太一もこれはとても育たないと望みをたつたが。そこは親の情として、一度は医者に診せられたかった。

ところが、―お前でも自分の子は可愛いが―と父からやられた時は、太一の息はとまった。後日、父は―医者にゆくな―とは言わなかったと弁解したが、太一が一文も持っていないのを知っていて、診察代も渡してくれないのは、見殺しにせいというのとかわりはなかった。この日に太一は家出を決意した。子供の葬式がすみ、彼は友人に頼んでその友の父親の農場にはいることにした。

太一は家をでて、おれたちはこれで日雇い人夫になつたと思つたが、千恵は黙つて夫についてきて、べつに不平はこぼさなかつた。けれどもそれは太一の思いすごしで、まだまだ彼らより下の者もいたのである。父より買ったロンジンの金側の腕時計に、ルビーのはまった指輪それを太一は俗っぽいと嫌つていたがパトロンに買つてもらつた。

それで彼らの一年の生活費がでたのは、太一も驚いた。―おれのやった品はおいてゆけ―とまで、いわなかつたのは父も案外ぬけたところもあつたのだ。この国のおおらかさというか、家をでた若夫婦は世の辛酸をな

めたといいいながらも、明日の食い物にこまったことはまだ一度も知らない。

太一は父との諍いのすえ、当時のような境遇におちるのを望んだのではないが、初めて頭のうえに青空がはれてひろがり、気分がすつきりするのを覚えて、千恵にへたな冗談さえ言えるようになった。

その耕地に三年いた。太一は転居は好まなかったが、地主が土地を売ったので、出なければならなくなった。太一は自営の借地農はやれるほどの資金はもうけていた。

その頃、借地をして儲けるには十年おそかった。大農場で借地にだすところはなかったし、往昔、名のおつた日系集団地も、土地の疲弊につれて、地主たちは浮き足だっていた。見知らぬ土地ににかけてゆき、適当な借地をさかすのは頭のいたいことだったが、市の農産物仲買人とか、ベンソンの主人にあたるのも、ひとつの手だと教えてくれる人もあった。太一がP鉄道のU町ちかくの煉瓦工場の荒れ牧場をかりたのも、おなじ町の仲買商の世話であった。借地人を世話すれば、商人には得意先が一人ふえるので、金銭づくではあっても世話をするのである。

五域の荒れ牧場はどこから手をつけてよいか、見当もつかなかったが、仲買人の世話でトラクターを二回いれてもらった。整地までの出費はおおきかった。けれども

工場主が職人の長屋をかしてくれたので、助かるところもあつたのである。そこで太一はいくらかは儲けたのであるが、柄のわるい環境だったので三年ででた。

後年になって回顧してみると、そこでも千恵はドナ・チエとよばれて長屋の人気者になった。世知がらく詮索すれば、千恵は職人の女房たちから、月末の食料不足をかりるためにのせられていたともいえるのである。けれども二世でもない彼女がポ語を自由につかいこなせるようになったのは、その煉瓦工場の長屋にいたあいだに、しぜんと身につけたものである。そして太一もブラジル人の長所と短所を観察できたのも、その長屋ぐらしからであつた。

太一夫婦とは板壁一枚をしきって、後家の婆さんがひとり住んで、生煉瓦の型ぬきをやっていた。朝は早くからトン・トン・トンと調子をつけて働くが、午後は陽のあるうちにやめる、すると夕暮れから夜にかけて、週に二・三人の男が通つてくると千恵はいう、後に婆さんはある老人によばれてU町にこすと、息子のジュリオとというのが嫁のベネジッタをつれて引き越してきた。そしてすぐに馬に曳かしてやる泥こねの仕事についた。それが夜になると隣にきかすように騒がしいのである。

ある夜、隣の部屋があまりにもきしむので、目ばしこいのと好奇心のいちばん強い千恵は、耐えきれずに板壁の節目からのぞいてみた。電圧のさがった黄色い電燈

のしたでも二人の痴態をはつきりと見たのである。

もう子供の三人もあるひね女房なのに、興奮に顔をあからめて、台所で調べものをしていゝる太一のわきにきて、―あんた、やつていゝるわよ―と下司つぼく口をきいた。それも姿態が正常でないという、太一には未体験のものだったが、千恵がへんなものを見たものだとおかしくなつた。性交の型としてそのような図を、戦後の日本からくる雑誌でみたことがある。楽しんで子供のいらない夫婦にはもちいられる型のようなのである。千恵の好奇心によつて太一らもひさしぶりに燃えるという余徳があつたわけである。

けれども、あまりにも変わったポーズは長続きしないものか、ベネジツタの下腹がふくれてきた。それにしたがつて夜の夫婦は穏やかになつた。ベネジツタは大きな腹を自慢らしく突き出して、長屋をわたりあるいたり、女たちの仕事場にいって作業の邪魔をした。

そこでは千恵は野良にでなかつた。町ちかくで人手に不足はなかつたし、彼女にはけっこう裁縫の注文があつて、家でミシンをふんでいゝるのでベネジツタがくるようになった。すると、台所の食器棚においてあつた小銭がなくなり、藤の繊維であんだ浅い籠にもつておいたトマトとかミカンが減るようになった。千恵が数をかぞえておくと、ベネジツタの帰つたあとでは数は合わないのである。千恵は息まいて責めてやると怒つた。太一は見た

わけでもないので、滅多なことでは言われないと宥めて、別棟にいるイタリア系の職人の女房に、誰とはいわずに物がなくなると言えと、勧めておいたところベネジッタはそしらぬ顔できていたが、その後ものがなくなるは止んだ。物をとられて一時は怒っていた千恵も生来気の良い女だから、一腹の子がほしがるのねーと言って、ちよつとした物をやっていた。ベネジッタは反り身にならなければ立つておれないほどに、腹は前に突きでてきた。外人は下帯をしないから出るだけ出ばらしてーと、千恵は笑っていたが、産み月の話をしたり出産の心得なども教えていた。

それから幾日かがすぎたある日、突然に長屋中にひびくほどの、アイ・アイと叫ぶ声をみんながきいた、長屋から工場の者たちも騒然となって、ジュリオの家に駆けつけた。千恵も女たちにまじって見にゆくと、為すすべもしらないジュリオの手の下で、陣痛の痛みでベネジッタはころがり暴れていた。さっそく救急車がよばれて、慈善病院に運ばれていった。一外人はおおげさなのね、恥ずかしくもなく泣きわめいたりして一、同性なのに千恵は冷笑していた。

五日、産院にいたベネジッタは退院してくるなり、自身の養生はどう思っているのか、お祝いにもらった初着に幼児をくるんで、長屋中に見せてあるいた。

煉瓦職人などはもとより給料もやすく、家族がふえて

くるとやっつけていけなくなり、子供がまず放置される、小学校にあがるのはまた良いほうで、たいていは朝から家をでてそこらあたりをうろつきまわる、半裸体で寄生虫や疥癬もちで、知能は未発達なのに、体格だけは大人ほどの未成年が、さきになってかなりの悪戯をやるが、親たちに知らぬ顔をしていかまわないのである。

太一は長女が小学校にあがる年齢になったので、自分の環境を考えて、同胞と接触できる地域に住みたいと思った。某植民地で土地を売るといふ人にあつた。地主がすて値だという金額でも、十域となると太一にはまたまた手はだせなかつたのである。ところで、世話をしてくれる者があつてH村で借地することができた。その村はいわゆる勝ち組の集団地で、借地人などはどこ馬の骨ぐらいに見さげられた。それでも村の集会には出るようにいわれた。

それから、しばらくしてA家に婚礼があつた。村中招かれたのに太一にはなんの通知もなかつた。その件で後日村では問題になつたというが、太一はそれぐらいの差別はふかく、気にもとめなかつたが、千恵は瞋恚をかくそうとはせず、――自分たちは運がわるくて今は借地をしているけれど、そのうちには見返してみせるから――と、意気まいたが堪えきれずにはらはらと涙をおとした。

その村での借地は、思ったより痩せ地で儲けはなかった。それに太一は無理がたたって心臓をいためた。軽い仕事ならやれたが、重い仕事はどうていやれない身体になった。太一の生涯でこの時がいちばんの危機であった。なるべくなら縁者の世話になりたくはなかったが、彼も途方にくれて、サン・パウロ市の近郊にいる義父に手紙をだしたのである。

宿世の縁 三

雨期の収穫のあと、干天の暑い日かつづいていた。その日は室内でもC四十度をこすほどであった。発病してからは暑さによわくなった太一は胸ぐるしくなり、井戸端のアングの木の下、まばらな葉かげで寝そべっている。と、野道からこの農地へ砂埃を背おってはいってくる車があった。誰かとおもえば太一の義父であった。彼は遠路サン・パウロ市郊外から、十五時間もの旅をしてP町につき、駅前からタクシーをやとつてきてくれたのであった。

「暑いのを、郊外とはだいぶん違うわい」

と言いながら、汚れたハンカチで顔から首すじをふい

た。千恵のさしだす冷たい井戸水をコップ二杯たてつづけに飲んで、ほっとしたところで、

「どんな具合じゃな」

米吉（千恵の父）は太一の病状をきいた。

日足がすすんでようやくのびた軒下の蔭で、千恵と米吉はながい時間をかけて相談していたようであった。いくら涼しくなっても三人は家にはいった。太一は義父の顔をうかがい、―これは別れ話になるかもしれない―と他人ごとのように予測した。というのも千恵は上気して昂然とした態度でいた。それは一家の危機にさいして、私がいるからという自負の気概からではなく、ここらあたりがよい潮時と千恵が父親を責めたのではないかと太一は憶測したからであった。

風がでてきて、ひと雨きそうな空模様になった。

「身内は良いにつけ、悪いにつけ近くに住んだほうがよい」

と米吉は言い、千恵の考えもきいて、太一は老父の世話になることになった。

借地の契約はまだ半年あり、裏作はできたのであるが、地主に了解してもらい、一カ月後、太一らはサン・パウロ通いの車に便乗して郊外のB郡に転居した。

千恵の父は太一の過去を知っていて、娘をやったのも太っ腹のゆえのことではない、松山家の資産などをみて

太一が中農の長男なのに、望みをかけたかもしれないが、二人の依存関係はまるで反対のものに変わってしまった。

その当時、太一の父母は亡くなっていた。干恵の弟に太一の妹がいつている関係で、別れ話にならなかつたものの、妹は―それ見たことか―と冷笑しているようであつた。太一はなるべく義父に負担のかからないように気をつかつたが、事は急なことだったので一時鶏小屋を改造して住んだ。義父はちかくの地主イタリア系のルイザ奥さんの土地を、一域借地してくれたのであつた。

ルイザには息子がひとりいたが、この親子は地主といつても、額に汗して働く人たちではなかつた。ほかに収入の途でもあるのか、太一は新米でその間の事情は知らなかつたが、日雇いの者がいうには、ルイザには裁判官の旦那があつて、そこから生活費がでるとはおそらく真実なのだろう。

太一は女地主の境遇など知りたくもなし、興味もなかつたが、ルイザの父はここにある宗教団体を誘致して、神学校や修道院を建て、一つの学園地域になすつもりだつたらしい。ところが何かの事情で計画は挫折したのだというつ　それはただ人の噂でないのは、郡道から山腹にゆく坂道をのぼると、両側にうえた檜の並木のおくに、かなり広い台地があり、そこに大きな建物の礎になる煉瓦のつみかさねが、荒れたままにのこつてい

る。

昔からの牛車の道をいくらか広げて、自動車の通れるようにした郡道を、B町からチエテ河をまたいでいる木橋をわたって、地から湧いたとおもえるような丸い巨石のあいだを五キロほどの山道をのぼったところに古びたお堂がある。そのわきの小径をはいるとルイザの屋敷につく、住まいに庭も気味のわるいほどに荒れている。もとよりこの人たちは手入れなどはしない、土着の者をよんでも支払いをしないので、誰も応じる者はないという、それでもルイザが町にゆくには、タクシーの送り迎えをさせていた。世間ではルイザの評判はとても悪いようであった。日雇いのジョゼーなどは―どんなうまい話でも婆の口にはのるな―と、親切ごかしに太一に忠告するのであった。

かつて太一が煉瓦工場の牧場を借地したおり、その主人は煮ても焼いてもくえない男といわれ、―えらい者の土地をかりたな―といわれたが、太一がちよくちよく好意の贈り物などをすると、人が変わったように良くしてくれた。ところで、ルイザは太一に借地させている。つまり恩恵をほどこしているとの気持ちからか、時には太一の小屋にきた。

「あんたが太一さんか、心臓がわるいときいたが、わたしは良い祈禱師をしっている。ちよつと遠いミナス州だが、いっか連れていったげる」

と親切の押し売りのようなことをいう。太一は感謝するようにはみせて、―自分には信仰している神さまがあつて、いつも祈願しているのです、この頃では発作もおさまり、体調もよくなつていゝと、そこは婉曲にことわつた。女地主は強いて勧誘することはなかつた。太一はルイザとは借地契約のほかは、よけいな関わりは持ちたくはなかつた。

義父のすすめもあつて、比較的に小面積でも生活のなりましたつという、トマテを栽培することにした。トマテと馬鈴薯は投機的な作物として、日系農家で大面積に植えつけをする者もあつたが、太一はそんな事情はわからず、生きてゆくためのたつきにしたまでであつた。

太一の病状は、この海岸山脈の高度と寒冷それに湿気が体に合つたのか、しだいに軽くなつてこまごました仕事ならやれるようになった。そして好運にも、何十年ぶりにそれも何時くるか予測もつかない、トマテの高値に当たつたのである。朝市の商人などがどこで聞くのか、太一の借地にまで車できて、青採りまで頼んでゆくのであつた。一時はトマテ一箱が白米一俵の値までした。サン・パウロの中央卸売市場でもとても品不足だということであつた。

太一は五軒の山道を自転車でバスの始発所までゆき、M市まで出てもらった小切手を銀行に預けた。帰りには

ちよつとした贅沢品などをとめたい余裕が気持ちにういた。その頃から、太一は邦人のバザールにおいてある本棚をのぞいてみるようになった。住まいは草ぶき泥壁の小屋であったが、夕食にはあかるいアラジンの石油ランプの下、家族が食卓をはさんで笑い声がおきるようになった。味噌汁をすすりながら太一は、江戸末期のある歌人のよんだ、「楽しみは」という枕詞をおいてよんだ歌のなかに、「一貧しいながら一家そろって、炉をかこんで夕餉をとるのはたのしい」との人間の真情にふれた歌を思い出した。太一が家をでる日、父からあびせられた罵言は忘れることはできない、自分はそれほどの背徳者かと、みずからを罰する心理になることもあった。ところが思いもしなかった好運にあって、家族の者が腹いっぱい食えるのをみて、不覚にも胸がつまって涙が椀のなかにおちた。

言ってみれば太一は宝くじに当たったようなものであった。普通なら三年あるいは五年もかかる、資本の蓄積が一年でなったのである。R農場が売りにだしている三城を求めてルイザの借地をでたが、その年こそ松山の家の礎が決まったといつてよい。

千恵が太一と夫婦になったについては、千恵も世間しらずの例にもれず、中農の長男の嫁なら、家のなかの取りしきりや、育児などの穏やかな日常をのぞんだようであったが、思ってもみない前歴が夫にあつたり、そのう

え親子に長年の不和があつて、無一文で家を出ることに
なつた、苦闘七年なんとかやつていけるめどがついたこ
ろ、太一は発病して廃人のようになった。義父の援助は
うけたが、それにも限度があり、結局は千恵が無能な夫
と子供四人をのせた屋台車をひく、使役牛の役をおわさ
れる羽目になつたのである。

太一は好学なのに、娘、息子には高等教育はさせられ
なかつた。それでも娘はせわする人があつて、S種鶏場
が裁縫塾にやる条件で女中を求めているのに、千恵は許
したのであつた。丈二は村の小学四年をおえ、ちかくの
田舎町でそのうえの二年を卒業しただけでやめた。その
頃、村でも裕福な家では子弟を上为学校にやる風があつ
た。丈二の同級の友も中学、高校にすすむ者もあつた
が、彼は家の事情を知つて、百姓をするつもりでいるよ
うであつた。

義父は孫のどこに目をつけたのか、

「太一は良い息子をもつた」

と千恵にもらしたというが、子供らしい身軽るさで、
嫌がらずに家の仕事を手伝うのをさしたのだろうか、自
分の婿への評価のはずれたのを、孫で埋めなおそうとし
たようであつた。丈二の性質の軽いのは、たぶん母規ゆ
ずりだろうし、それでいて浮いたところのないのは太一
の遺伝だろうか、商売気もあつて一人前になれば、車を

使って卸市場の売り場にゆきたいふうであった。

借地は一年でやめて、自分の土地での営農になったので、一家の喜びはひときわであった。その頃より千恵は息子とともに努めれば、松山の家もまんざら見切ったものではないとの自信をいただくようになった。

R村では地所が高みにあるものと、低地の者とは作物はちがっていた。前者ははじめから高みを望んでもとめていた。組合に加入していて、一千羽養鶏と果樹を植えていた。後者は川べりの低地のチシヤ作りであった。低地の者は高地の者からはいくぶん見下げられていた。日銭がはいるだけに暮らしが派手で柄もわるかった。ある家では週末に仲間がよって賭博をやるという噂であった。

太一はそんな連中とはかかわりはなかったが、金まわりの早いチシヤ作りをはじめたのであった。丈二が食料品店を買ってサン・パウロ市にでるまでに、R村で二十年ちかくの歳月がながれている。その間に千恵の両親は亡くなっている。奥地で発病した太一は―どうせながくはもたない身体だから―と、覚悟をきめ義父に女房と子供を託するつもりで、この地にうつってきたのだが、海岸山脈の気候が療養にむいていたのと、まず生活の心労がなくなった故か、心惇昂進はしだいにおさまっていた。千恵の妹の嫁いでいる遠縁に医者がいたので、太一は義父につれられてその人の診察所を訪ねたことがあつ

た。その人は丁寧に診てから、―とくにわるいところはないですよ―との見立てをした。―発病した夜は脈がはやくてまんじりもできなかつたのですが―と、太一が説明すると、その人は―あなたの神経からきている心臓病ですな―、と診断をした。―脈が早くなるようでしたら、これを服用しなさい―、と鎮静剤を処方してくれた。

太一は千恵に医者の見立てた（神経性心臓病）とは知らさなかつた。

「すぐにもお前が後家になるのではないらしい」
太一は笑って報告すると、千恵はむっとして、どちらにしてもあんたは人に心配かけるので、笑い事ではないとして黙っていた。後日、しだいに夫の病状が千恵にもわかつてきた。

「あんたという人はなんでも私に隠すのですね」
太一は妻から嫌味をいわれた。彼はニヤリとして―お前には喜ぶほどのニュースでもないだろう―と胸の中で思ったが口にはださなかつた。

R村では太一夫婦について、妙な噂がひろまっていた。トマテで当てたという羨望と一風変わった家庭という見方であった。まず奥さんがえらい働き者というのであった。千恵が股ぐらまで泥水につかって仕事をしているというのであった。日雇いのジョンもいるので、まさ

か女の身でそんなよごれ仕事をするわけはなかったが、誤って千恵が溝にころんで、服を着替えにきたところを、なにかの用件でおとずれた婦人会の役員に見られたのであった。働き者の女房というのはべつに恥ではない、ところがその亭主というのはあまり評判はよくはない。旦那は青白い顔をした無愛想な四十代の男で、客間といっても泥壁の粗末な部屋だが、棚には現代文学全集や哲学書がならんでいたので、戦後の移住者の婦人会員が話題にして、R村の会長さんが一度太一に会いたいともらしたとか、それは千恵が―松山は病人だから―と断ったので、実現しなかったが、それからは千恵さんの旦那は偏屈者ということになった。千恵はなんでも都合のわるいことは太一の故にしたが、

「へんな噂がひろまっついていて、恥ずかしくて会にいかれもしない」

「なんだ、亭主は哲学者で女房は下水さらいか、それでも噂になるだけでも、H村からみればえらい出世だぜ」

あんたという人はわたしを便利な道具のように使つて、知らぬうちに人から立てられるようになると思うと千恵は腹がたつのであった。

千恵の死後、太一が妻の遺品を整理していると、写真帖のあいだから一冊のノート・ブックがでてきた。彼女は字が下手というので、かき物はすべて太一に頼んでいた。それについて太一は千恵をいじめた。書いてやるか

わりに見返りをとるわけであった。それは夫婦の間だけの行為であったが、いやいやながらも字を書くよりはましらしかった。

彼女はそれでもこっそりと日記はつけているようであった。太一に見られるのをとても嫌っていたので、サン・パウロ市に転居のさい、すべて焼いたか捨てたかにかがいがなかったのに、その一冊が残っていた。太一は興味をもってページをめくっていった。字はたしかに下手であったが、そこにはほかの誰でもでない亡妻の仕種のようなものがあつた。

日記のなかに干恵が思いのままに、夫への不満、恨みなどありつたけの心情をぶちあけてないかと、太一はそれを期待するつもりで、目を通していったが、夫への感情はなにも述べてはなかった。それは日記などといえる性質のものではなく、作業日誌といふべきで毎日の仕事を克明に記録してあつた。繁をさけるために毎月のある一日の記述を原文のままにここに再録してみよう。(かなりあつた誤字は訂正し) 欠けたところは書き足した。

六月〇日、晴れ、今朝から急に寒くなりました。朝アルファセ(レタス)を切るのに、手がちぢかんでナイフを持つことができません。でも切らなくてはなりません。外人は寒いのでくるのが遅くなります。竹林のわき

のは全部きりました。今日はフェリヤード（休日）なので半分はやすんでいます。

七月〇日、霧、今朝は冷え込みました。温度はC十度でした。朝はやくからアルファセを七十箱つくりました。毎日寒いので楽ではありません、夫はコウベ（たかな）を四箱だしました。朝、コウベをとるのは冷たくで体にこたえるそうです、それで明日だすぶんは夕方とり、朝は箱づめだけです。

八月〇日、晴れ、今日はようやく晴れました。天気の良いのは気持ちがつきりします。洗濯物がよく乾きます、畑もだいぶん乾きました。朝クレパス（ちぢれレタス）をきりました。仕事がおくれています、昼に私は嫁とT家にいきました、A子さんは日本へゆかれるとこのことで、羨ましい思いで餞別をとどけてきました。

十月〇日、くもり、夜中に小雨、アルファセ二十箱つくりました。夫もネギを「箱だしました。ネギは汚れをとるのに手がかかります、晴れたりくもったりの天気でした。

十一月〇日、晴れ、今日は息子たちと海にゆきました。プレッソン（血压）の高い人は海がよいとききました。いつペンいつてみたかったです、三時ごろかえってきました、はやかったので嫁は子供をつれて実家にゆきました。夜やすむとおきる脚のひきつけは、その日はおきませんでした。

十二月0日、晴れ、もうすぐお正月です。一年すぎるのは早いものです。だんだんと年をとるだけです。

一月元旦、晴れ、私は朝はやくからおきて、煮物やしをまきました。昼まえ娘たちがきました。みんなで海にゆくためです、夫は新年会にでかけました。私ひとりで留守をしました、天気はよし静かなよいお正月です、心も静まります。

二月0日、晴れ、今日は日曜日です。今日まで婦人会の会長がきまらず、私がかりにやっていますでしたが、今日始めてはつきりしました。Sさんがなつてこれで会も治まり、私は気分もすつきりとなり、頭もよくなりました。

三月0日、くもり、私は息子につれられて、ドートルに診てもらうためM市にゆきました。ボウコウがわるいといわれました。

四月0日、くもり、今日は婦人会の団体旅行です。私たち夫婦に孫二人参加しました。イタペチリツカ デ セーラについたのは九時でした。金閣寺を参観してからアルモツソ（昼食）にしました。それからショツピン グーセンターにゆきました。エルドラードというところ です。私は孫に玩具を買ってやりました。そこをでてもまだ早かったので、セアザ（中央市場）を見学しました。家では一日はすぐたつのに、このような行楽にはいろいろなところがみられて、一日はながいものです、村の会

館についたのは午後の七時でした。

五月0日、晴れ、今日もアルファツセきりです。わたしも五時には畑にいます。荷をだしてからは昼食をし、それから動きづめです。そんな毎日ですから夜ははやく寝ます。

この日記は千恵が五十代のころのもので、孫もできていたし丈二は車をつかって作物を中央卸市場にもってゆくほどで、奥地での苦難はとなくなり忘れられるほどの境遇に松山家はあった。追い風をうけた帆船のような家運に、なおその上に棟をあげようとする、上気した千恵の意気が感じられた。

太一夫婦は小さいながら地主になり、かねて念願のいなみの暮らしがなりたつようになった頃、五年からの古い入植者で、小川をはさんで北山の家族がいた。地ならしをした岡に煉瓦づくりの白壁の住宅、そのしたに幾棟かの養鶏小屋、裏につづく山腹は、葡萄、枇杷、桃などの果樹園になっている。北山は村でも裕福なほうで、一段たかくとまっているという風があった。なにかの折、北山家に慶事があつて太一も招かれていた。

かつてのH村のように除け者にはされなかったが、個人としての付き合いはなかった。太一はこれからのこともあるし、顔だけでもだしておこうと思った。北山家は

ほんの目の前にありながら、小川に橋はなかったのので、彼は二キロも下流にさがって慶事の家についた。

その日、太一はいつも見ている北山家の側から、はじめて自分の地所を見たわけであった。よく整地された畑はまあ一人なみであったが、低い屋根に瓦をおいただけの泥壁の家は貧農そのものであった。太一は年々の収益をまず農機具と灌水の設備に投じていたので住居にまでは手がとどかなかつたのである。丈二も一人前になってくるし、来年あたりは家でも建ててみるかと、晩飯のあとで話題になるようになった。

千恵が婦人会でできてきた話によると、北山は小金をためていて、それをうまく運営している賢い男のようであったが、一面では車道楽というのか、新車がてるたびに替えていた。日本人会の集まりに新車のピカピカがきていると、それは北山なのであった。

いつだったか、千恵が北山さんの奥さんは得ですねー、と大一に当てこすりを言ったことがあった。それというのも北山は週に二回土曜日とか日曜日に、細君をつれて車で町に出かけるからであった。それがなぜ分かるかといえ、夜になって北山が帰宅すると、道の具合で車の前燈が太一の家や倉庫を、強い光の束でひとなげするからであった。どうかすると、千恵たちの夜業とちあうことがあった。太一の体調もよほどよくなっていたので、軽い作業、箱に品物の等級別のゴム判をおし

たり、出荷伝票をそろえているとき、どうかすると、向かい側の闇から光の束がさあつとくることがあった。千恵は視線をその方にむけて、

「北山さん、今日もどこかへ出かけたらしい」

太一に聞こえるように言う。彼は女房の気持ちはよく理解できるのでコクリと笑う。千恵は生来にぎやかな人による処がすきなのだ。演芸会とか、カラオケのかえりにレストランなどによるのもわるくない、夫の音痴とちがつて、私もその気になればかなりに歌えると、彼女は思う。ところが夫はなんとという変人だろう。世人の楽しみごとはたいてい無視するか、冷笑する。だいたい人の集まるところが嫌いというからこまった人だ。

ある日のこと、区長さんがきて北山さんが倒れたと知らしてくれた。その朝、コーヒーをすまして車の始動をさせていると、急に気分がわるくなったという、見舞いにいつてきた千恵の話では―奥さんも顔がむくんでいて別人のようだった―という。北山家では老人ふたりが病気になるっても、生計にどうということはないにしても、不測の失費にちがいない。太一は他者を例にして説をたてるのではないが、人がこの世に生まれてきたのは、有りうべからざる有で、その貴重な生を楽しむのは、太一も古代ギリシャの哲人エピクロスの説に賛成だが、血をさわがす享樂よりも、読書に思索という静謐を最上と説いたのを、

(注・二ページ落丁)

い、一年に一作ぐらいのわりで、コロニア文芸誌に創作をだすようになった。太一は家計のくるしい頃でも邦字新聞はとっていた。その新聞社が賞をもうけて懸賞小説を募集しているのは知っていた。太一は古今東西の短編の名作に接して、心底うたれるとともにこの世に生をうけてこのような芸術にあえるのを喜んだが、当選作などを読んでみてこの程度の作品なら、自分でも書けるのではないかと思ったのである。

ずうっと前のことになるが、P鉄道の通っているI郡で借地をしていた頃、ある農場から何人かの人骨がでてきて話題になった件があった。地方新聞の記事によると、それらの骨は専門家の鑑識によると十年からのもので、おそらくは開拓の当時、山伐り請負人が仕事じまいに、人夫たちにピンガをだして酔わし、賃金を奪う目的で全員を惨殺して埋めたのだらうとの、推定がもつぱらであったが、後日犯人が挙げられた話はきかない。

太一はこの事件をもとにして、原因と目的はちがうにしても、日系人社会でもこのような犯罪はおきうるのではないかとして、『かすかな声』と題した一編をあんで

応募したところ、後日、新聞社から佳作に入ったとの通知があった。はじめて応募した作品が採りあげられたので、太一は驚きもしたが心底うれしかった。

けれども、それは千恵には知らさなかった。また何日かたって新聞に載ったのも言わなかった。ところが、月に一回ある村の婦人会の集まりからかえってきて千恵は、

「あんた、今日わたしみんなの前で恥をかいたわよ」
えらい剣幕で太一にくっつかかった。

「どうした。何があつたんだ」

「あんたの小説が入选したと、でかでかと新聞にでているというしやないの、Nさんの奥さんが言ったのでしよう。みんな知っていて知らないのはわたしだけでしたからね」

「うん、それは前に新聞社から通知があつた。ところでそれがどうしてお前の恥になるのだ」

「あんたのことをわたしが何も知らないのです、笑われたり呆れられたりしましたからね。あんたという人はわたしを何とと思っているの、入选したならそう言うって新聞くらい見せてくれてもよさそうなものなのに」

「お前、毎日見ているじゃないか、何を読んでいるのだ」

千恵はどんな読み方をしているのか、曲がりなりにも邦字紙は読めたのである。

「それは見たわよ、けれどもまさかあんだのとは思わなかったわ」

「佳作、『かすかな声』松山太一と特大活字でいただいたろうが、だいたいお前は日ごろからおれをみくびっているから、このような現象になり、それが還元してお前の恥になるのだ」

「またむずかしい用語を使って、あんだこそ人を馬鹿にして、日ごろわたしを便利な道具ぐらいにしか考えていないのでしよう。ちゃんと分かっていますからね」

「それじゃ、おあいこじゃないか、お前はおれを案山子ぐらいにしか思っていないだろう。文学などいくら勉強しても、一文のたしにならないと、お前は言ったが、これでもいくらかの賞金はもらえるらしい」

「百つかって十かえってくるようなもので、損なのは分かっていますよ」

「十年の研鑽なって、やっと佳作になった。来年度は入賞作をものにするぞ、材料はいくらでもためてあるんだ」

「まるで気違いだよ、この人は」

「一陽来春だ。出世したんだから、そのつもりでいってくれ」

「あんだという人は水くさいから、わたし辛いのですよ、それが他人にまでわかってしまった」

「水くさいか、そうでないかほどうしてわかるのだ」

「そりや、わかりますとも」

幾日かすぎたのち、太一は千恵に話しかけた。

「もう何年ぶりだ、サン・パウロ市へ行っていないが、いっしょに授賞式にでかけるか。I通りのYブツフェが場所らしい、子供たちは正治（義弟）に頼み、留守はジョンにまかせとけばよい」

「それはいつですの」

「土曜日とあったから、明日だな」

「明日！」

千恵は悲鳴のよう声をだした。

「着物はどうします、髪の手入れは、あんたという人はいつもこうですかからね」

「誰が田舎者の服や髪に眼をやるものか、おれは古い背広でゆく、文学をやるほどの者にそれぐらいの気概がなくてどうする。そして夫婦は一心同体とはどうだ」

「阿呆らしい、泣かされるのはいつも女ですからね、なに一つしんみりと心をいれて夫婦らしくしてくれたためしはないのに、あんたのは鍍金ですよ、世間は騙されてもわたしはちゃんと分かっているんですからね」

「そうか、おれは嘘でかためた男か、なるほど情のうすい身勝手な男、偽病人（太一のは多分に神経症の心臓病と珍察されたのが、いつか千恵の知るところとなった）ずるい男初めから間違ってくっついた二人だから、

この歳まできたのが不思議なぐらいだ。そのうちに天罰
てきめん悪役には罰がおりるはずだ、お前は生きのこつ
て、おれの悪口でも言いながら余生を楽しむんだな」

「またそんなことまで独りぎめにして、あんたはわた
しが先に死んでも、寂しくはないでしょうね、わたし
ね、もしものことがあっても、あんたのことは丈二がい
るので心残りはないのですよ」

人間、明日のことは分からないというが、過去のある
日に彼らがこんな会話をしたのを太一は思い出した。

「自分は宿痾もちだし、女房よりは五つもうえだか
ら、千恵がのこつて当然だろうに、このように考える
と何とも解けない謎をつきつけられたような混乱におち
る。」

彼ら夫婦は生きてきて、こころの通わないまことに浅
い縁の者たちであつたが死に別れもじつに呆気ない別れ
になつた。

(終わり)